時流を読む

「物語屋」というコミュニティ業

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

時代が生み出す新たな仕事

時代の変化とともにあらたな職業が生まれるのは必然ではある。とはいえその生まれたばかりのあらたな仕事に出くわした時の驚きは大きく、時代の変化を実感せざるを得ないものがある。

例えば10年近く前の話になるが、「生きもの調査」である。田んぼの中にメダカ、ドジョウ、ミズスマシ、ゲンゴロウ等の昆虫がどれだけいるか、田んぼや畦等にどんな水草や草花等があるか、を観察するとともに、その田んぼ等がどの程度生物多様性に富んでいるのかを判定する。

生物多様性についての認知が随分と広まってきたようには思うが、まさか生きもの調査が仕事として成り立つとは当時、考えられなかった。それが現状、次第に環境問題に関心の高い生協関係や農協関係を中心に、生産現場と消費者との交流や環境教育の一環として生きもの調査を取り入れる動きが地道ながらも浸透しつつある。

登場した「物語屋」

ここで取り上げてみたいのが、約半年ほど前に出くわした「物語屋」である。その場に応じて落語をはじめ、いろいろの話をするのが仕事である。物語屋であるところの中川哲雄さんは、東京の西部にある小金井市、東京都で最も大きい小金井公園のすぐそばの住宅が立て込んだ、昔の長屋風の雰囲気を残したところに住む。自宅で「DOZO寄席」を定期的に開催するとともに、適時、お話しの会を催している。またお呼びがかかれば出かけて行って、その場の雰囲気に応じた話をする。

実は昨年秋から西東京市の筆者宅を開放して、「つたやさんち」なる平日の午後、2時間弱のお茶の会的な集まりを月例で開いている。ご近所&友人・知人20名弱が集まり、お母さんと赤ちゃんもまじって、皆でお茶飲み話をしたり、歌をうたったり、時には踊りが飛び出したりもする。そこに中川さんにも再々登場願っているが、中身は、落語、小話、地元の歴史等々とレパートリーは多岐に及び、都度替わる。古典落語等を除けば物語屋さんが自ら書いたり、調べたりした話も多い。

孤独な時代だからコミュニティ

12月の31日には、物語屋さん宅で年忘れの会が開かれた。落語の芝浜が中心であり、お茶とぜんざいつき。夜の開催案内をしたところ、すぐに定員オーバーとなり、急きょ、午後を追加。これに参加してきたが、10数人の来場でこれも満席。

芝浜は古典落語の人情噺で、名作中の名作。これを中川さんが熱演。ついホロリとさせられた。中高年層が主で、年末、テレビを見て寂しく過ごすよりは、にぎやかなほうがいいという人たちが集まったように受けとめた。時代とともに高齢の夫婦や一人住まいが増え、コミュニケーションを求める人たちが多くを占めていることの反映ではないか。物語屋に象徴されるコミュニティ業の動向が注目される。